

新たな時代がすぐそこに 三つの基盤を維持しつつ 教師の思いを込めて授業に工夫を

日本女子大教職教育開発センター所長・人間社会学部教授 **吉崎静夫**

1872（明治5）年の学制発布から今日まで、日本の義務教育を支え続ける小学校。今後、グローバル化が進み、異なる文化や価値観を持つ人たちと共生する必要性が高まる中、これからの小学校に求められるあり方や授業づくりの工夫について、日本女子大の吉崎静夫先生にお話をうかがった。

世界に誇れる 日本の教師の指導力

日本の教育は、世界的に見て非常に高い学力を育んできました。なぜそれが可能なのかを欧米の研究者が注目してきたほどです。私は、その答えは次の三つの要素にあると考えます。

① 始業・終業のあいさつをしっかり行う、私語を慎むといった「授業の成立に必要な学習規律指導」

② 基本的な生活習慣や毎日一定時間机に向かう

などの「家庭での学習・生活習慣を促す指導」
③ 教師が互いに学び合って授業力を高める「教師の力量形成を促す機会」

先生方は、この三つの要素を基盤に、子どもたちと一日中、一年中向き合い、授業実践と研究と工夫を重ねてきました。日本が世界に誇るべき義務教育の特長です。

更に多様な人々とつながらないと 生きていけない時代が到来

学校は、子どもたちが社会で生きていく力を

育む場です。そして今、その社会は大きく変わっています。世界を席卷する国際化の波が容赦なく日本にも押し寄せています。経済的に見ても、景気の低迷や少子高齢化によって消費の伸びが期待できない日本国内よりも、むしろ需要拡大が著しいアジア諸国を市場として重視する企業が増えています。外国での事業機会を獲得するべく、国内外で外国人を積極的に採用するようになってきているのです。国内においても、外国人と競争して会社に就職することも身近になるでしょう。

一つの会社に各国の人が働き、世界を相手に仕事をするようになれば、コミュニケーションのあり方が変わります。英語を公用語にする国内企業が既に現れています。言葉だけの問題ではありません。異なる文化や価値観を持つ人たちといかに良好な人間関係を築くかが問われます。どのような職場であっても一人で仕事は出来ないからです。

更に、これからは、各自が得た知識やノウハウを個人で蓄積するのではなく、皆が情報を共有し、互いに影響し合うことにますます価値が置かれる社会になると思います。ソーシャルネットワークサービス（SNS）やクラウドコンピュティンクといった言葉を耳にしたことがあると思いますが、これらはその一形態と言えるでしょう。

たとえ国内にいても、日本人は日本人同士だけでなく、自分とは文化的背景の違う人たちと

もつながらなければ生活できない時代が到来するということなのです。

「かわり」「活用」の必要性を 日常に引き付け実感させる

このように社会が変わる中、小学校教育で身に付けさせたい力は二つあると考えています。

一つめは、「かわる力」です。多くの人が情報を持ち寄り、話し合っこそ、良いアイデアが生まれます。将来、文化的に異なる社会で育った人たちと共に働いたり、競い合ったりする機会が増えれば、自分と違う個性や考え方を柔軟に受け入れ、交流を深めることが必要です。



よしぎき・しずお 1950年茨城県生まれ。大阪大助手、鳴門教育大助教授を経て現職。学術博士。専門は教育工学で、特に学力向上を目指した授業づくりに詳しい。「授業づくり」では、学生に教えるだけでなく、全国の学校現場や教育委員会を多数訪れて指導に当たっている。著書は『デザイナーとしての教師 アクターとしての教師』（金子書房）、『事例から学ぶ 活用型学力が育つ授業デザイン』（ぎょうせい）ほか多数。

二つめは、「活用する力」です。かわりの輪が広がり、人間関係が多様になれば、直面する課題や問題も複雑になります。対応するには、自分と他者の知識や情報を、状況に応じて組み合わせて活用する力が不可欠です。

この二つは、経済開発協力機構（OECD）も今後の社会生活に重要な力として挙げており、世界中で育成しようとしていることがうかがえます。ところがこうした力は、一朝一夕には定着しません。だからこそ、社会に出るまでに時間がある小学校から育むことが重要なのです。新学習指導要領が知識の「習得」と共に「活用」を重視しているのは、そのためです。

社会で必要とされる力が変わりつつあるからこそ、その基礎を担う小学校の役割はますます大きくなっています。

実際の授業づくりを考える上では、他者とかかわり、知識を活用する力を付けるよう、授業を工夫していただきたいと思います。こうした力がいかに大切かを、先生方が「教える」だけでなく、子どもの日常に引き付けて「実感させる」ことがポイントです。

場合によっては、教師以外の立場にある人の方が、子どもへの説得力が強まることもあるでしょう。例えば海外で活躍する人に、仕事で普段どのようなコミュニケーションを行っているかを話してもらえば、子どもたちは目の前の学習が自分の将来に役立つと実感する良い機会になるはずです。

「かわり」や「活用」の必要性を体感させる活動には、子どもの好奇心や探究心に応えられるだけの準備や知識が求められます。先生方だけで行うには負担が大きすぎる場合は、視点を外へ変えて外部人材を探してみたり、ICTを取り入れたりすることも、今後はもっと本格的に考えてみてはいかがでしょうか。

こうした「かわる力」「活用する力」を身に付けさせる授業をつくるために、誰に何をしようか、外部から力を借りるにはどのような手立てが考えられるか。先生方には今後、その企画を立てて実現にこぎ着ける、いわば授業をプロデュースする力が必要になってきます。

外部人材やICTを活用した 授業づくりに取り組む小学校の例

新しい時代に必要な力を意識した授業づくりを始めている小学校は、たくさんあります。例えば、茨城県つくば市のある小学校は県立自然博物館の協力を得て、4年生の理科「季節と生きもの」の単元で次のような活動をしています。

まず、教室と博物館の学芸員の研究室それぞれに大型モニターを設置し、双方を特殊な携帯電話でつなぎます。いわば、携帯電話によるテレビ会議が出来る環境を整えるのです。

そして、子どもを5〜6人のグループに分けます。グループごとに、身近に生えていながら名前を知らない植物をデジタルカメラで撮影し、画像を学芸員に送信し、その植物の名前を尋ねます。学芸員は、すぐには答えを言いません。子どもにも葉の枚数、色や形といった特徴を説明させた上で正解を伝え、更に、似た特徴を持つ別の植物を挙げます。子どもは友だちと話し合いながら、教えてもらった植物を同校内にある植物園で探してその画像を撮影・送信し、気付いた特徴を改めて学芸員に説明します。これを繰り返すのです。

この活動において、子どもは学芸員との会話を通して新しいことを知るだけでなく、皆で協力して得た情報を整理し伝えることで、これまでの知識を活用して言葉で説明する力を身に付けています。外部の人材やICTを上手に取り

入れつつ、他者とのかわりや知識の活用の大切さを、子どもが身をもって感じる工夫を凝らした授業の好例です。

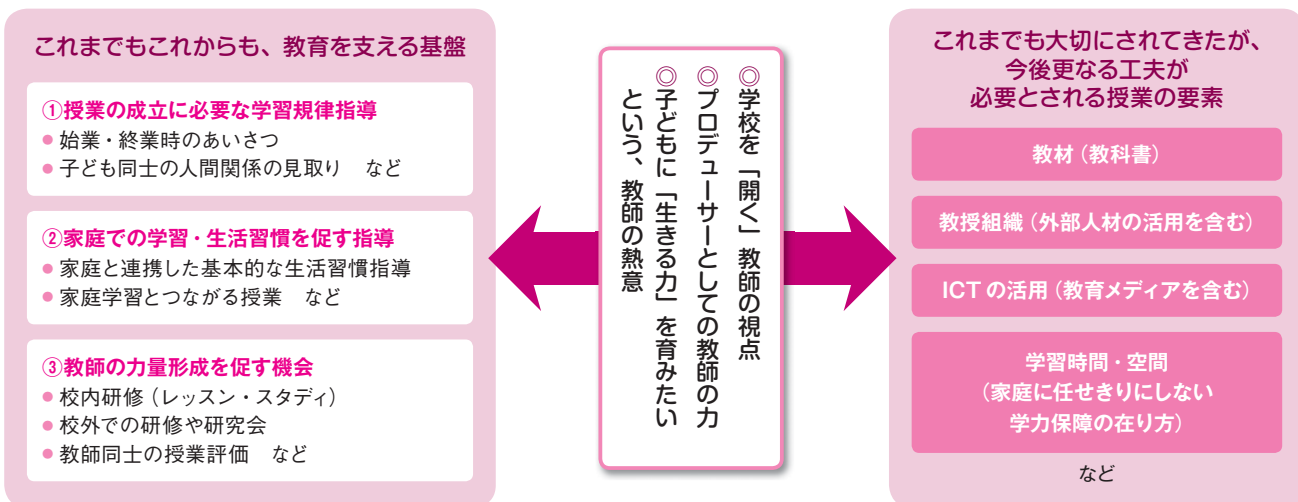
新たな授業づくりは 従来の基盤の上に築かれる

授業づくりの基本は、これまで日本が大切にしてきた基盤、つまり「授業の成立に必要な学習規律指導」、「家庭での学習・生活習慣を促す指導」、「教師の力量形成を促す機会」の三つを守り続けることです(図)。

ただし、今後の社会を生きる上で求められる「かわる力」「活用する力」を育むために、「子どもたちに必要な力を付けさせたい」「そのためにもっと良い授業をしたい」という先生方の思いや、そこから生まれる新たな工夫を、従来の指導に少しでも加えていただきたいと思えます。良い授業をつくるためにまず大切なのは、先生方一人ひとりの「思い」です。目の前の子どもたちが大きくなった時の社会で何が求められているのかを考えてみる。「○○の力を身に付けてほしい」という思いを込めて、普段の授業をちよつとだけ工夫する。このように日々の指導に取り組めば、おのずと教材や指導法に変化が生まれ、将来を生きる子どもたちに必要な力を付ける授業を実現できると思います。

私が気掛かりなのは、基盤の一つである教師の力量形成の機会をどう担保していくかです。教師の年齢が50歳代と20歳代とに二分される学

図 日本の小学校教育における授業づくり



校が見られるようになりました。見習うべき先輩が身近にいないために授業力を付ける上で重要な校内研修がうまく機能しなかったり、教師間の世代のギャップが大きいために教師同士が学び合う集団になりにくかったりといった課題が表れています。少子化によって小規模校が増えていることも、この傾向に拍車を掛けています。つまり、そう遠くない将来、これまでの基盤が揺らぎかねない深刻な状況になります。

子どもの学力も心配されます。授業以外での学習を家庭に任せる学校が増え、家庭間の教育に対する意識や経済的条件などの違いによって、学力差が広がっています。もし教師の授業力が下がり、家庭学習と関連付けた授業が出来なくなれば、更に差が生まれてしまいます。

この二つの課題の解決にも、工夫して企画し学校を開く、先生方のプロデューサーとしての役割が重要です。校内だけでは力量形成が難しくても、近隣の小学校との共同研修や中学校との共同授業研究など、他校とのさまざまな連携があり得ます。学力面では、学校や教育委員会がアルバイトを雇ったり、ボランティアに頼むなど、定期的に補習を行うことも一案です。

先生方の足並みをそろえ、学校の進む方向を定めるには、管理職の先生方の力が欠かせません。社会が大きく変わる、時代の転換期だからこそ、校長先生にはこれまで以上に、先を見通す力とリーダーシップでご指導に当たっていただきたいと思えます。

未来の先生に聞く「私が大切にしたいこと」—吉崎先生の記事を読んで—

授業の基盤を大切にしながら 多様な交流が生まれる学級をつくりたい

明星大教育学部4年

澤崎美智子さん



吉崎先生のお話を読み、「かかわる力」と「活用する力」の重要性がよく分かりました。教師の卵として、子どもが知識を得るだけでなく、得た知識を組み合わせる活動を取り入れていきたいと思えます。私が実際に取り組む立場になったら、次の二つを大切にしたいと考えています。

一つめは、多様な交流です。友だち同士だけでなく、例えば地域に住む保護者以外の大人ともかかわることで、子どもはさまざまな考え方に触れるでしょう。自分と年齢の離れた人とどうしたらうまくコミュニケーションがとれるかを探るうちに、おのずと視野が広がると思えます。

二つめは、どの子どもも自由に意見を交換できる学級づくりです。一人ひとりが互いを思いやる気持ちを持てるよう指導し、教室を、恥ずかしがらずに自分の考えを述べられる空間にしていきたいと考えています。友だちとの話し合いを通して、自分の意見を鍛えてほしいからです。

この二つは、何も無いところからは生まれません。学習規律や生活習慣、先輩の先生方に教わる姿勢といった授業の基盤があってこそ実現できると思えます。日本の小学校教育の特長を守りながら、工夫を重ねていきたいです。

外国語活動と言語活動を工夫し 「かかわる力」と「活用する力」を育みたい

日本女子大人間社会学部4年

湯山千怜^{ちさと}さん



吉崎先生がおっしゃる「今後の社会で身に付けさせたい力」と2011年度から全面实施された新学習指導要領との関係を考えてみました。私は、外国語活動と言語活動に特に注目しています。

外国語活動は、異なる文化や価値観に触れる良い機会となります。教師自身が外国語に親しむ姿勢を持ち、ALTとの連携を図ることで、子どもの「かかわる力」を育てる授業をつくっていききたいです。

言語活動では、新しい情報から自分の考えを深めて言葉で表現する活動こそ、「活用する力」を育成する鍵になると思います。実際に指導する立場になったら、日々の授業の中で教師と子どもとの対話はもちろん、子ども同士が意見を交換する機会も増やしたいと考えています。そうすれば、子どもの「かかわる力」を伸ばすことにもつながるのではないのでしょうか。

私は教師を目指す者として、いずれの活動でも子ども一人ひとりを丁寧に見取っていききたいと思えます。授業場面でも生活場面でも、子どもが居場所を感じられる環境をつくることによって、学習意欲につながっていくと考えています。